

出会いは偶然

いつの世でも男女の出会いは偶然に支配されているものである。ここ半世紀で地域社会が崩壊し、未婚の人に積極的に相手を紹介しようという、おせっかいな人がいなくなり、高額な費用を取るお見合い産業が増えている。しかし、ここでもなかなか相手が見つからないのが現状である。先日、そうした業者が公表している成婚率を高くごまかしていたことが判明し、行政指導を受けた。

社会が流動的になったことと情報が増えたことで、昔のように地域や学校、職域だけで相手を見付ける必要がなくなり、要求水準だけが高くなったという意見もある。なかなかよいソフトウェアが見つからないのと事情は似ている。

一方、携帯電話の出現で出会い系へのアクセスが簡単になりすぎたため、犯罪や不幸に巻き込まれる若者も後を断たない。その害に声を大きくして、出会い系に規制をかけようという考えが、役人や政治家から出ている。

役所主導で規制をすると、結局はすべての出会い系がなくなってしまう。ただ出生率を上げればよいという不純な動機で始められた、味気ない官営お見合いシステムしか生き残らないかもしれない。それでは、さらに晩婚少子化は進む一方となってしまう。

ところで、筆者はWinnyなども別種の出会い系であると思っている。マスコミはその被害だけを大きく取り上げ、その制作者を叩いているうえ、取り締まりの論理もそれに沿っている。これは、携帯の出会い系そのものが悪である、という論調と軌を一にしているように感じられる。

どちらも怖いかもしれないが、そのような考えでは道路も横断できなくなる。出会いは必要である。しかし、その内容を見極める力を付けるのは、それを使う各個人の責任であろう。

出会いの成功は自己表現力

ところで、インターネット上で比較的有名な出会い系を使って、出会いの状況を調べてみた。

とりあえず、ある日の一定時間内に、新規に上げられた自己紹介の数を自動集計した。結果は、男：158件、女：12件で圧倒的に男が多い。時間帯を昼間にずらすと、女性の比率は上がる。それでも男女比は3～5：1程度である。

そこで、再婚需要が高そうな50代に限ってすべての自己紹介から、キーワードで趣味を拾ってみた。このときの母数は、男：882件、女：147件であった。中高年の男女で差が出そうな趣味として、旅行とゴルフで検索すると、旅行は男性登録者の48%、女性登録者の61%と女性のほうが比率が高い。一方ゴルフは、男：21%、女：13%と女性の比率が低い。映画、読書などは男女で有意の差が出なかった。

これらの条件だけでなく、自己紹介の文章も調べた。全員を



いい相手がいないかなあ〜

調べるのはたいへんなので、乱数を出しそれを検索順の番号として10件ほど拾い出した。

自己紹介の長さであるが、男性は平均250字程度、女性は平均150字程度と差が出た。すなわち女性のプロフィールがそれだけつかみにくいのである。女性は申し込まれてから、相手を選ぶという原則が見えてくる。

なお、内容は男性のものは非常に利己的であり、店の宣伝文句のような内容が多い。一方、女性は非常に情緒的で、結局どういことを望んでいるのか理解できない内容が多い。これでは、なかなかマッチングが取れないのは明らかである。

ただ、自己紹介すなわちプレゼンテーションの出来で、出会いは決まるということはいえそうである。実際ソフトウェアも、使い込まなくては本当の良し悪しはわからないが、無料のお試し版の出来で、人気は決まるものと思われる。

かつてLotus 1-2-3という非常に出来のよい表計算ソフトウェアがあったが、コピー・プロテクションがかかっていたために、コピーできたMicrosoft社の同様なソフトウェアに敗れ去った、という見方もあるくらい、お試しの必要性は高い。

外注や部品も出会いで決まる

この議論を推し進めると、ソフトウェアやハードウェアの開発・製造やハードウェア部品の選択も一種の出会いである以上、出会いの機会拡充とプレゼンテーションの巧拙は、よい出会いの確率を大きく左右していると思う。

顧客のように選ぶ立場の側からみると、出来がよい出会いを作り出す体制(広告、ショー、Webサイト)とそこでの製品や技術・会社紹介は、たとえば悪いが相手を見つける出会い系と、さらに口説き落とす力量と同じであるような気がする。

出会いの偶然を必然に近付けるには、提供側の自己主張だけでなく、使い勝手や相手の気持ちに響く姿勢が必要であろう。海外の安い製品や技術労働力と対抗するには、この精神がぜひとも必要である。いつまでも売り手市場の気分では、中国やフィリピンから花嫁を迎えても結婚できない男性が増えるのと同じく、そのうち破たんしてしまうだろう。(key)